

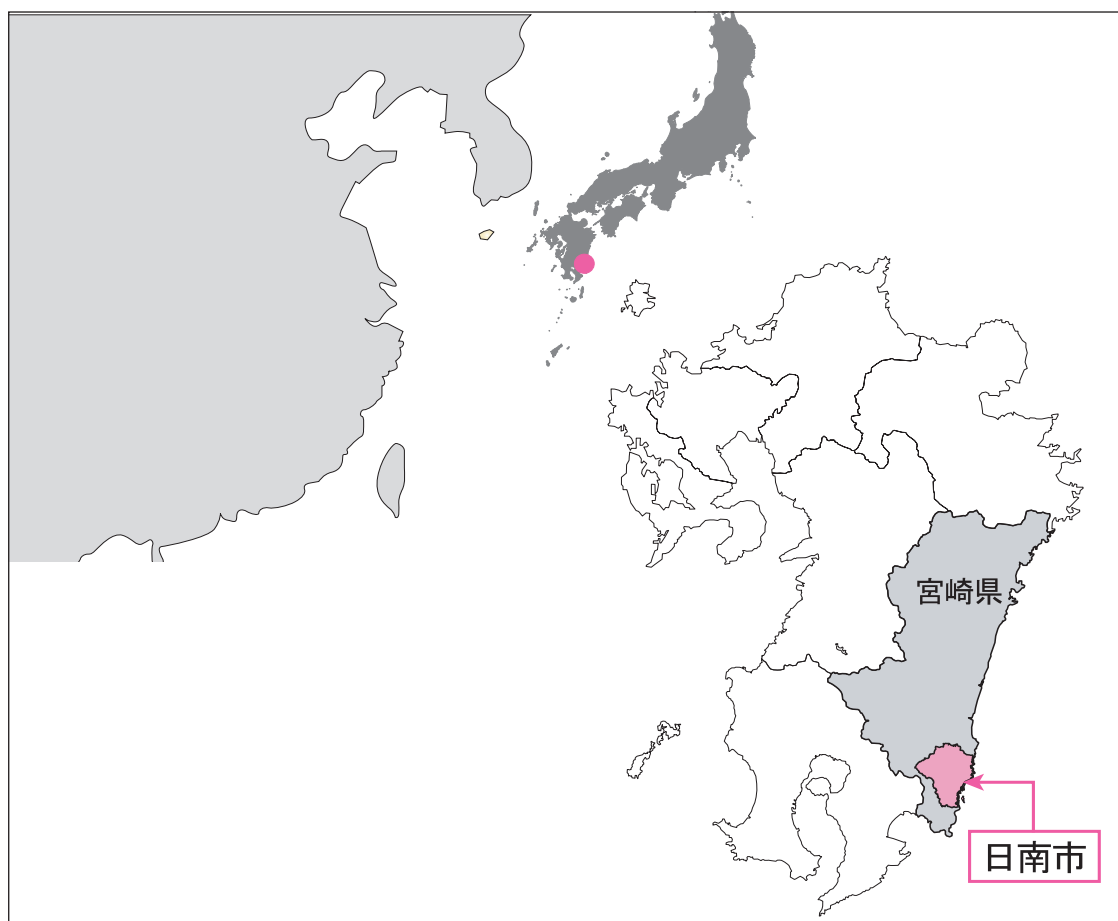
第2章 日南市の概要と課題

1. 位 置

日南市は、九州の南東部にある宮崎県の南部に位置し、東に日向灘を臨み、西は都城市・三股町、南は串間市、北は宮崎市に隣接している。

総面積 53,612ha のうち約 80% が林野で、北西部の南那珂山地に標高 1,000 m 級の小松山や男鈴山等を有する。

宮崎市から日南市を経て鹿児島県に至る延長 112km は全国有数のリアス式海岸で、日南海岸国定公園の指定を受けている。



日南市位置図

2. 沿革

日南市の地名が歴史史料に現れるのは平安時代の「倭名類聚抄」が最初で、宮崎郡飫肥郷としてその名が記される。平安時代後期になると島津荘が成立し、飫肥は奈良の興福寺一乗院が荘園領主となる。戦国時代には日明貿易や琉球貿易の拠点港（油津や外之浦）と豊富な山林資源をめぐり、宮崎平野一带に勢力を拡げてきた伊東氏と、飫肥を勢力下に置く島津氏が抗争を繰り返した。

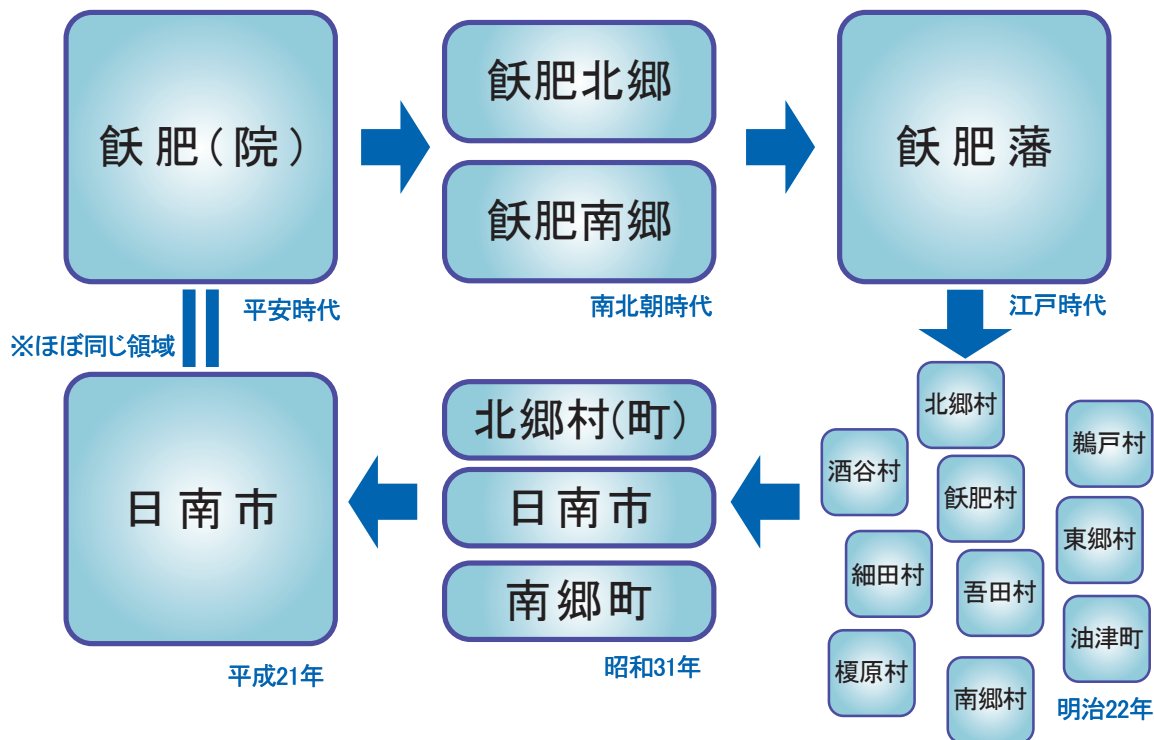
豊臣秀吉の国内統一後、伊東祐兵は、飫肥の地（日南市、宮崎市の一部）を与えられ、以後、幕末まで伊東氏が飫肥を支配する。藩政時代の藩校振徳堂からは安井滄洲、安井息軒、平部嶺南等の教授陣のもと、小村寿太郎ら有能な人材を輩出した。

明治4年（1871）廃藩置県により飫肥県が誕生したが、後、都城県、宮崎県、鹿児島県を経て再置県（分県）された宮崎県に編入された。

日南市は、昭和25年（1950）に吾田町・油津町・飫肥町・東郷村が合併して市制を施行、昭和30年（1955）から31年（1956）にかけて隣接町村を編入した。南郷町は昭和15年（1940）に町制を施行、昭和31年（1956）に榎原村の一部を編入した。北郷町は、昭和34年（1959）に町制を施行した。

平成21年（2009）に日南市、北郷町、南郷町が合併し現在に至る。

日南地域の変遷



3. 自然環境

(1) 地理的特性

本市は、宮崎県南部に位置し、北西部の鰐塚山系は1,000 m級の小松山や男鈴山などの山々に囲まれ、東側は日向灘に面しており、面積536.12 m²のうち8割弱（78.0%）が林野で占められおり、その大半は飫肥杉の人工林で占められている。また、可住地面積は22.0%で、可住地面積のうち耕地面積の割合は24.4%である。なお、鬼の洗濯板で有名な日南海岸は「日南海岸国定公園」に指定されている。

市域の南西部は平地と比較的なだらかな丘陵地形を呈し、広渡川や酒谷川等の河川沿い平地とあわせて市内でも貴重な平地、水田地帯と畑地を形成している。



飫肥杉 人口林の山

(2) 気 候

気候は温暖多照で、降雪は殆どない。平野部では一年の日照時間が平均2,200時間以上と多く、南海型気候区に属する高知県・紀伊半島南部などとともに日本で最も日照に恵まれた地域の一つであり、温暖な地帯に属する。特に冬季の日照時間は大変長く、冬型気圧配置で山沿いが曇っていても平野部は晴れている場合が多い。

一方で鰐塚山系を含む山間部では、降水量が年間3,000 mmを超える多雨地域で、四国の太平洋岸、紀伊半島の東部とともに日本の最多雨地帯となっている。全国的にも多雨地帯に属し、梅雨・台風・秋雨前線等による被害を受けやすい。

温暖な気候を活かしてサトウキビの栽培が盛んであったが、近年は南方系の果樹栽培も増加している。



鵜戸の千畳敷奇岩

(3) 植 生

市域の8割を占める山林の過半には飫肥杉が植林されている。海岸部に近い山林には照葉樹が多く、海浜部にはマツの防砂林が見られる。日南海岸には亜熱帯植物の群生も見られ、フェニックスやハイビスカスなど、南国情緒をイメージして道路景観の修景で植えられた植物も多い。

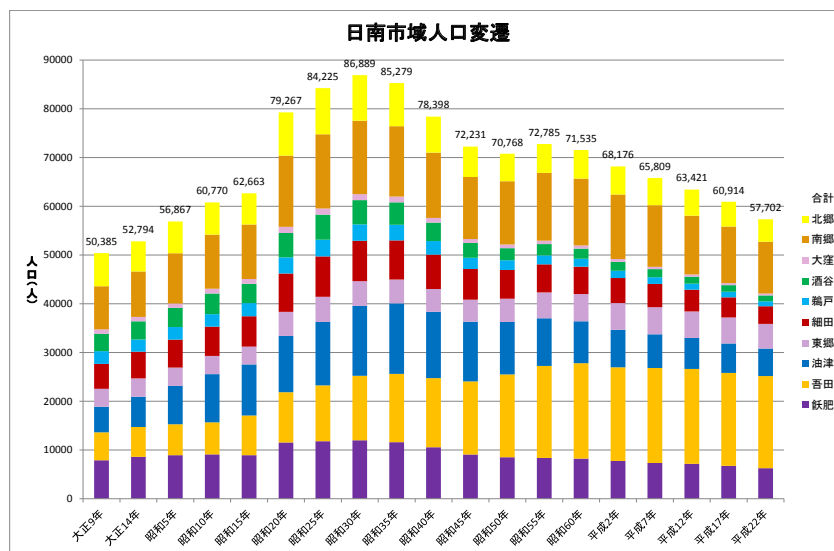


虚空蔵島の亜熱帯林

4. 社会環境

(1) 人口

平成 22 年 (2010) 4 月 1 日の人口は 57,406 人で、昭和 60 年 (1985) の 71,535 人から 25 年間で約 20%減少した。高齢化率は 31.2%で、昭和 60 年 (1985) の 14.1%の倍以上で、高齢化が進んでいる。一方、1 世帯あたりの人数は、昭和 60 年 (1985) の 3.21 人から平成 17 年 (2005) には 2.42 人に減少して、高齢者の独居もしくは高齢者世帯数は増加している。このような高齢化の急激な進行により、市役所周辺の吾田地区以外の中山間地では、高齢者が集落人口の半分以上を占めるいわゆる限界集落が多く、今後、集落機能の維持が課題となる。



(2) 産業

就業人口は、昭和 60 年 (1985) が 33,494 人 (第 1 次 23.1% : 第 2 次 26.1% : 第 3 次 50.7%)、平成 22 年 (2010) が 27,917 人 (14.6% : 23.5% : 61.5%) である。高齢化の進行等により、25 年間で就業者数は 5,577 人 (人口の約 10%に相当) の減少となっている。第 1 次産業従事率は減少しているものの、全国比では平均の倍以上である。

なかでも王子製紙日南工場は、昭和 12 年 (1937) に日本パルプ飴肥工場として創業して以来、本市はもとより宮崎県を代表する工場の一つとして操業を続けている。平成 20 年度現在で、王子製紙日南工場を含めた主な誘致企業として、36 社 2,307 人の雇用がある。

油津は、昭和初期には東洋一のマグロ漁港として栄えた。現在も油津の他、大堂津、目井津等の漁港で、近海マグロ、カツオを主とした漁が行われている。近年は地元水揚げ、金額ともに大幅に減少してきている



日本パルプ飴肥工場 (昭和 26 年)

が、カツオの一本釣りの漁獲高は日本一である。

農業では、超早場米やスイートピーなどの花卉類の栽培、緩斜面での柑橘類の栽培等が盛んである。

（３）交 通

近代以前は、飫肥から北郷を通り山越えで宮崎に至るいわゆる飫肥街道が宮崎方面へ向かう主要道であったが、現在は宮崎から海岸線を南下する国道 220 号が串間方面へ伸び、バイパス区間も増加して利便性が増している。ただし、連続雨量が一定値を越えると通行止めとなる。日南から都城方面は国道 222 号で結ばれる。

東九州自動車道は現在工事中で、日南と北郷にインターチェンジが造られる予定となっている。

宮崎方面と鹿児島県志布志を結ぶＪＲ日南線は、昭和 38 年（1963）に宮崎と結ばれた。油津港は重要港湾として位置付けられており、貨物用の定期船が就航している。

（４）観 光

昭和 40 年代の日南海岸は新婚旅行のメッカとして多くの観光客が来訪したが、その後は急激に減少した。現在は、鵜戸神宮に年間 70 万人以上、飫肥城とサンメッセ日南に同 10 万人以上の観光客があり、とりわけ日南海岸の知名度は高い。

合併後の日南市では、これらの観光地に加え、道の駅酒谷、道の駅なんごう、港の駅めいつ、北郷森林セラピー基地、富士海水浴場、南郷のマリンスポーツの拠点栄松ビーチ等、本市の海と山を満喫できるスポットは数多い。さらに、最近では、地域の歴史や自然や産物を活かした新たな観光資源として、油津の登録文化財群や復元したチョロ船の体験乗船、ＪＲ日南線の観光特急「海幸山幸号」、飫肥城下町食べあるき町あるき、ご当地グルメの日南一本釣りカツオ炙り重等が人気である。



鵜戸神宮

（５）公共施設

市役所（本庁）のある吾田地区に国や県の地方機関は集中するが、法務局と裁判所は、郡役所時代の名残で飫肥にある。また、海上保安庁や油津港湾事務所は油津に所在する。市役所の支所や図書館、文化会館、公民館等は、旧日南市、南郷町、北郷町それぞれにある。県立日南病院は油津地区、市立中部病院は細田地区にある。その他、プロ野球のキャンプが行われる野球場や



天福球場

各種スポーツ施設も旧 3 市町に所在する。

（６）教 育

市内には、小学校 17 校、中学校 11 校、高等学校 5 校（平成 23 年度より 3 校）がある。そのうち、市内にある 17 の小学校中 7 校は児童数 60 人未満、10 の中学校中 4 校が生徒数 100 人未満で、平成 21 年（2009）に北郷の小中一貫教育校の開校に伴い、黒荷田小学校が閉校した。また、平成 23 年度には潮小学校が閉校し、鵜戸小学校、鵜戸中学校が小中一貫校となる。



北郷小中学校

（７）名 産

温暖な気候を利用した早期栽培のミカンやボンカン、日向夏等の柑橘類、ピーマンやキュウリ、近年盛んになったマンゴー、完熟金柑などの農産物がある。スイートピーは、南那珂地区だけのオリジナル品種も出荷される。また、宮崎牛やはまゆうポーク、みやざき地頭鶏等畜産物も多い。その他飴肥の天ぷらやせんべい、マグロやイセエビ、カツオ、生節や魚うどんなどの海産物とその加工品が主な特産品となっている。



さとねり（風田）

5. 社会環境等に関する課題

日南市の社会基盤に関わる最大の課題は人口問題である。我が国で国勢調査が始まった大正9年(1920)には、現在の日南市内の人口は50,385人であった。それから35年後の昭和30年(1955)には、約1.7倍の86,889人にまで増加した。しかし、昭和30年(1955)の調査をピークに、高度経済成長による都会への人口流失などで人口は減少し続けて、平成22年(2010)10月の国勢調査では57,702人(平成22年国勢調査速報値)(昭和30年(1955)の2/3)となっている。

また、高齢化率も31.2%であるとともに、高齢者の独居や高齢者夫婦のみの世帯が急増しており、中山間地区においては、集落機能の維持すら困難になってきている。さらに、少子化や未婚者の増加が拍車をかけて、高齢者の自然増よりも人口の自然減が高齢化率を押し上げている。

人口流失の大半は、高等学校生が卒業とともに大学進学や就職によって都会に出て行くことによる。その理由は、本市(若しくは宮崎県)内には教育機関や就職場所が少なく、生活全般について都会の方に魅力があるからであると思われる。

戦後の経済成長期からバブル期までは、商工業ともに、販売額や生産額を維持もしくは増加させてきたが、人口減少とともに高齢化も進み、労働力人口も減少して、商工業が衰退する。さらに、農林水産業も、高齢化や後継者不足による就業者数の減少、さらには農産物輸入自由化による価格競争の波に吞まれて、年々生産額や漁獲高等が減少傾向にある。例えば、全国に名をはせた飫肥林業は、西日本の造船材として本市の経済を支えてきたが、木造船が造られなくなり、木材の輸入自由化による木材価格の大幅な下落により、林業関係者の多くが失業した。漁業においても、マグロ延縄やカツオの一本釣りによる水揚げが、本市経済の大きな柱であったが、近年の原油の高騰や後継者不足、マグロ漁の各種規制等により、水揚げの減少傾向に歯止めがかからない。南国の気候を生かした柑橘類や超早場米も、輸入自由化による農作物の価格低迷、さらに後継者不足に苦しんでいる。

一方で、道路整備が進み、宮崎市や都城市と約1時間で行き来することが可能となった。また、大手資本による郊外型大店舗が相次いで市内に開業するようになり、人口減少とも相まって、油津や飫肥などの商店街の衰退に拍車がかかってきた。

このような社会基盤上の問題は本市だけの問題ではないが、経済的な低迷が市民のやる気や元気を奪い、地域に住むことの誇りを奪っていることは否めない。

6. 歴史的変遷

(1) 原始・古代

南九州に位置する日南市は、原始・古代から火山噴火による影響を強く受けていた。現在も、人間の日常的な活動範囲では、鹿児島県の錦江湾を噴火口とする始良カルデラが約3万年前に大噴火（始良大噴火）した時の噴出物（入戸火砕流）であるシラス土壌に厚く覆われている。この大噴火により、南九州の生物ほとんどは絶滅した。

その後、南九州では約15,000年前から縄文時代となって、日本列島の中では最も早く土器を使用し始めることになる。日南市内でも、大窪地区の前畑遺跡や塚田地区の坂ノ上遺跡で縄文時代早期の住居等が発掘されている。

しかし、屋久島の北海底の竹島・硫黄島を外輪とする海底火山「鬼界カルデラ」が約7,300年前に大噴火して、いわゆる「アカホヤ」と呼ばれるオレンジ色の土壌を1m近く堆積させて、再び動植物をほとんど絶滅させた。したがって、このアカホヤ層は、その下から出土する縄文時代の遺跡は草創期もしくは早期で、その上からは前期以降の遺跡となるため、年代決定に使われている。

弥生時代になると、シラス台地上に集落が形成され始める。市内には18ヶ所以上の遺跡が確認されており、平野地区の影平遺跡（中期）や上方地区の大園遺跡（後期）等が調査されている。

古墳時代になると、宮崎平野では生目古墳群（宮崎市）や西都原古墳群（西都市）、新田原古墳群（新富町）等の巨大な前方後円墳を含む大規模な古墳群が形成されていった。しかし、日南市内には、現在まで、有力首長を葬った前方後円墳は発見されていない。幕末に相次いで発見された細田古墳や油津山上古墳は、自然丘陵に竪穴式石室を設けた古墳で、いずれも海に面して築造されている。

さらに、7世紀に入って築造された風田の狐塚古墳は、宮崎県内では最大級の横穴式石室を主体とした終末期古墳で、国特別史跡となっている西都原古墳群の鬼ノ窟古墳よりも大きい。古墳の立地も、海に面した砂丘上で、石室の開口部は海を向いている。平成6年（1994）の調査では、須恵器や馬具、ガラス玉とともに、銅製の腕や鈴が出土しており、海の道を通じたヤマト政権との繋がりが想定される。

なお、古墳時代中期以降の南九州には、隼人の墓制とみられる地下式横穴墓が宮崎平野南部から諸県地方、串間市等に広く分布しているが、日南市内には現在まで一基も確認されていない。

7世紀後半には律令国家が成立して、現在の宮崎県と鹿児島県大隅地方を含めた日向国が設置された。和銅6年（713）には大隅国を分国されているが、養老4年（720）に隼人の反乱により大隅国守が殺害されたため、大伴旅人による隼人鎮定が行われた。そ



狐塚古墳石室

のために多くの殺生を行ったので、律令政府は諸国放生会を行ったが、隼人の居住範囲では、隼人族の首長の身代わりともみられる「弥五郎」を祀った。これが、田ノ上八幡宮の弥五郎人形行事であると考えられている。同様の行事は都城市山之口町や鹿児島県曾於市大隅町、日置市等にも伝わっている。

日向神話では山幸彦と海神の娘トヨタマヒメが結婚する舞台となった鵜戸神宮の社伝には、延暦23年(804)に社殿を再興したとあり、海上交通の要衝でもあった同社が、平安時代のはじめには南九州の有力な神社の一つであったと考えられる。一方、隼人族の祖とも伝えられている海幸彦を祀る潮嶽神社が北郷町宿野にあり、神武天皇の妃であるアヒラツヒメの名前が訛ったといわれる油津や、阿多が訛ったとみられる吾田など、日向神話にちなんだ地名が多い。

また、一方で平安時代中期の「和名類聚抄」によれば、日南地方は宮崎郡飫肥郷として記されていた。なお、飫肥城大手門前の発掘調査では、同時期の掘立柱建物群や土器が出土した。

平安時代後期になって大隅、薩摩地方に島津荘が成立するが、飫肥はその寄郡となり、奈良の興福寺一乗院が領家となる。建久8年(1197)の建久図田帳によると、飫肥北郷400町、飫肥南郷110町が島津荘として記されている。



弥五郎人形行事



鵜戸神宮社殿

(2) 中 世

南北朝期の『長谷場文書』では、荘園制度崩壊の状況が伺える。同文書によると、康安3年(1344)に長谷場鶴一丸という人物が飫肥北郷の弁済使代官職および収納使職に任じられた。前任者の水間栄証、忠政親子は年貢を納めなため解任されたが、貞和2年(1346)には城郭を構えて抵抗したことが記されている。同文書には、悪党の用語も現れることから、南北朝の飫肥においては在地領主層が成長して城が築かれ、領主間の抗争も激化してきたことが伺える。同時期の文化遺産として、永仁3年(1295)の板碑がある大迫寺跡石塔群や歓楽寺墓碑群などの石塔群が市内各所に分布しており、南九州の中でも飫肥は早い時期から石塔文化が定着した。

南北朝期以降、全国の商業流通が活発となり、琉球を中継した明や東アジア諸地域との交易が活発に行われるようになると、南九州の重要性が高まってきた。



大迫寺跡石塔群

日向国内でも、外ノ浦や油津のある飫肥の地は、海上交通の要衝として重要な位置を占めることになる。そのため、長祿2年(1458)には、島津忠国が新納忠統を飫肥城主に封じている。文明16年(1484)、櫛間城主であった伊作久逸は伊東氏と計って飫肥を攻め、以後、飫肥の地をめぐる島津と伊東の争いが何代にもわたって続くことになる。文明18年(1486)以降は、島津忠廉が飫肥城主となり、飫肥の地は豊州島津氏が直接支配することとなった。

豊州島津氏は日明貿易でも重要な役割を果たすことになる。永正16年(1519)、幕府は大内氏と細川氏の船で遣明船派遣を計画した。大内義興は、飫肥領主の島津忠朝に遣明船の建造とともに、細川氏の船を飫肥領内に抑留するように依頼しており、飫肥安国寺の僧げっしょえいじょう月渚永乗も副使につぐ地位で大内船に乗ることになった。

一方、細川氏の船の正使となった相国寺のらんこうずいさ鸞岡瑞佐は、永正17年(1520)に、師のぎよくえん玉淵ずいこう瑞杲とともに、土佐経由で日向を訪れて、油津の慶雲寺や臨江寺に滞在しながら日向各地の有力者と交流し、細川船の安全確保の根回しを行っている。

その後、大内氏は、もう一艘の遣明船建造を、島津忠朝に依頼しており、結局、油津で建造された大内船と、細川船が大永3年(1523)に明へ出航した。しかしながら、寧波において、細川船の方が大内船よりも後に着いたにもかかわらず、明国の役人を買収して、先に交易を始めたことから、大内船側が怒り、細川船の正使瑞佐を殺して、寧波の町を荒らして帰国してしまった。いわゆる寧波事件である。

この事件に飫肥領内の油津や外ノ浦が大きく関わっている点は注目される。まず第一に、当時の最先端の造船技術を必要としたであろう遣明船の建造を油津で行っていること、さらに、飫肥安国寺の僧けいあんげんじゅ月渚が外交の実務者として乗り込んでいることである。月渚の師で、飫肥安国寺を建立した桂庵玄樹も、遣明船に副使として乗り込んだことがあり、当時の飫肥領には、高度な造船技術があっただけでなく、外交実務を行うことの出来る人物(禅僧)も抱えていたことになる。

とりわけ、桂庵は、後に徳川幕府の正式な学問となる朱子学を我が国に取り入れた人物であり、後に京都の建仁寺の管主となる。その弟子として月渚、一翁、なんぽぶんし南浦文之が続いた。南浦文之は外ノ浦出身で、いわゆる「文之点」を完成させるとともに、島津氏の政治顧問として琉球や東アジアとの外交文書を作成しており、『鉄炮記』を記したことでも有名である。これらの学僧の一派は薩南学派と呼ばれている。

このように、室町時代から戦国時代にかけての油津や外ノ浦は、国内の交易のみならず琉球や東アジアとの交易拠点として栄えたことから、宮崎平野を支配していた伊東氏にとって、飫肥領に進出する大きな動機になったに違いない。飫肥城を巡る島津氏と伊東氏の攻防戦は、まさに、海上交通の利権をめぐる争いであつたと考えられる。

15世紀から16世紀にかけては、こうした伊東と島津の攻防戦により築かれたとみられる多数の城郭のうち、飫肥城や酒谷城のように、シラス台地を深い空堀で縦横に区画した

南九州型とも呼ばれる、大規模な曲輪をもつ中世城郭が出現した。

宮崎平野を中心として日向をほぼ手中にした伊東義祐は、天文10年(1541)から永禄11年(1568)までの28年の歳月をかけて飢肥を攻略し、次男の祐兵を飢肥城主とした。この間、飢肥城を中心とした丘陵一帯は城砦として整備され、町屋や寺院、神社も配された城下町が形成されはじめたと見られる。

しかし、元龜3年(1572)の木崎原の合戦で島津軍に大敗したことから義祐は大友宗麟を頼り豊後に落ち延びた。この伊東一族の中には、天正少年使節の代表となった伊東マンショもいた。天正6年(1578)高城合戦で大友氏も島津との争いに敗れると、大友氏は豊臣秀吉を頼った。その後、天正15年(1587)に、豊臣秀吉の九州攻めで案内役を努めた祐兵は、その功で飢肥の地を与えられた。以後、幕末まで一度の改易もなく伊東氏が飢肥を支配することになる。



酒谷城跡

(3) 近 世

飢肥に入った伊東祐兵は本格的な城下町の建設に取りかかっている。『日向記』によると、慶長4年(1599)に前鶴の屋敷割を行い、種子筒町を立てたとある。元和の一国一城令(1615)によってそれまで清武や酒谷、南郷などに置かれていた家臣団の飢肥城下への集住が促進され、城下町建設に一層拍車がかかったと思われる。承応元年(1652)から万治2年(1659)のものと推定される城下絵図によると、明治時代以降に拡大した小川地区と新町地区以外は、現在の飢肥とほとんど変わることのない町割となっている。

飢肥城も、祐兵の入城後、シラス台地を空堀で区画した南九州に典型的な中世以来の曲輪をそのまま使用していたが、寛文2年(1662)、延宝8年(1680)、貞享元年(1684)の相次ぐ大地震によって、飢肥城本丸に大きな被害が発生したため、5代藩主祐実(1684-1686)は貞享3年(1686)から元禄6年(1693)にかけて、石垣を多用した近世的な城館に改築し、現在残されている縄張りとなった。

山林資源の効率的な輸送のため、広渡川河口近くから、乙姫神社(吾平津神社)の前の岩山を掘り通し、油津港までの堀川を開削することを決定した。このことにより、杉や松、楠などの木材をはじめ、藩の各種専売品を飢肥から油津港に運送することが飛躍的に便利になると判断されたからである。堀川は、天和3年(1683)から貞享3年(1686)の2年4ヶ月の歳月を要して完成し、藩の関船を繋ぐ御船倉も併せて造られた。

飢肥藩はもともと耕地が少なく農産物は豊かでなかったが、広大な山地と長い海岸線を有し、山林資源と水産資源に恵まれていた。そのため、相次ぐ手伝普請や、藩内の堀川掘削工事、飢肥城改修工事の費用捻出には、商品価値の高い松などの巨木を切り出すこと

によって賄われた。その後山林資源が枯渇してからは、飫肥杉を植林して、藩の主要専売品として育成することで、藩財政を補った。高温多湿な飫肥の地に成育する飫肥杉は、成長が早い上に油分が多く、軽くて弾力性に富むという造船材に打って付けの材木として全国にその名を轟かせた。文化、文政年間（1804 ～ 1829）には、野中金右衛門等による造林事業によって、飫肥藩内の山々は杉に覆われることになる。

19 世紀になって、藩の近代化や人材育成の必要から、第 13 代藩主伊東祐相は天保 2 年（1831）に安井滄洲・息軒を教授陣に招き、藩校振徳堂を開校した。振徳堂からは、飫肥西郷と呼ばれた小倉処平や小村寿太郎を輩出した。



振徳堂

（４）近 代

明治 4 年（1871）廃藩置県により飫肥県が誕生した。以後、都城県、宮崎県、鹿児島県を経て再置県（分県）された宮崎県に編入された。

明治時代になって以後、飫肥は、南宮崎の政治的中心地としての地位を維持した。経済面では、士族授産事業としての飫肥商社が、飫肥杉や樟脳、木炭などの藩専売品の販売を手掛けることになる。しかし、明治 10 年（1877）の西南戦争に薩摩方として参戦した飫肥隊への戦費提供やその他の経営方針を巡って、飫肥の町を二分する争いとなった。

一方で、油津は、明治後期から昭和初期にかけて大きく発展した。大正 2 年（1913）には飫肥油津間に県内最初の軽便鉄道が敷設され、大正 10 年（1921）には県内最初の上水道も完成した。また、大正 6 年（1917）、全国 7 箇所の漁港指定のうち、九州で唯一指定を受けて港湾整備が進み、ブリやマグロの水揚げが急激に増加した。とりわけ近海のクロマグロは、昭和 6 年（1931）には年間漁獲量は 36,817 尾（現在の約 25 倍）を数え、東洋一のマグロ水揚げを誇った。さらに、江戸時代後期に大規模な植林が行われた飫肥杉が、この時期に盛んに伐採されたため、堀川運河の両岸は弁甲材（飫肥杉の両面を面取りしたもの）が所狭しと積み上げられ、国内はもとより、台湾や朝鮮半島、中国大陆まで輸出されていた。



マグロ水揚げ



油津 堀川運河の貯木場

この頃の日南市の経済を支えたのは飫肥杉とマグロである。宮崎県は、平成 3 年（1991）から現在まで連続して、杉丸太生産量日本一であるが、その杉は県下全

域に植林された飫肥杉である。また、昭和初期における油津のマグロは東洋一の水揚げを誇り、油津のマグロの価格が日本のマグロの価格を決定していた。

飫肥杉とマグロで栄えた油津の歴史を概観してみると、前述の通り大正6年(1917)には、農商務省が国内7箇所を指定して漁港整備を行うこととなったが、九州では唯一油津港が指定された。油津漁港以外の6港は、福島県小名浜漁港、千葉県白浜漁港、静岡県伊東漁港、新潟県能生漁港、三重県波切漁港であった。この修築工事費は29万円(国庫補助1/2、県費1/2)で、大正7年(1918)から大正13年(1924)の間に防波堤、岸壁、埋立、浚渫等を施行したことから港湾機能が飛躍的に向上し、以後のマグロ景気に繋がることになる。とりわけ堀川運河沿いに築造された第1号物揚場は、長さ115.47間、幅25間で、油津漁業組合や大阪商船株式会社油津荷客扱店の事務所や、船員簡易休憩所、港湾監視所、共同販売所等の施設が設置された。

油津港の漁船についても、大正5年(1916)、それまでの一人乗り帆船であるチョロ船にかわって、渡邊与一が石油発動機船大正丸を初めて建造して以後、急速に発動機船が増加する。

その結果、大正元年(1912)には60,722円であったまぐろ延縄漁の漁獲高が、大正15年(1926)に240,000円、昭和4年(1929)には1,319,647円、昭和6年(1931)には宮崎県のみならず、大分県、鹿児島県、高知県から操業船573隻が油津に入港し、クロマグロ36,817尾、1,726,951円を記録した(当初は大分県が多かった)。こうした空前のマグロ景気により、昭和4年(1929)には無線局を設置し、鉄塔2基が建てられた。昭和5年(1930)には魚揚場を拡張し、漁業組合事務所を新築した。さらに、同年には指定港湾に指定され、昭和6年(1931)から昭和8年(1933)にかけては、農山漁村失業救済低利資金や時局匡救地方港湾改良事業を受けて、第2号物揚場307m、第3号物揚場95mを築造している。しかしながら、太平洋戦争の開戦にともない、重油の配給が規制されたことから、漁獲高が激減し、昭和18年(1943)には操業船75隻、438,615円となった。

このように、油津港の整備が進められたのは、マグロ景気のみならず、飫肥杉の積み出し港としての期待も大きかったことによる。飫肥藩物産局の専売品であった飫肥杉の取扱いは、明治4年(1871)に発足した飫肥商社に引き継がれたが、いわゆる飫肥商社事件により、商社としての取引は明治18年(1885)頃に衰退した。

しかし、日清・日露戦争以後、日本の大陸進出や「航海奨励法」「造船奨励法」改正に伴って造船材等の木材需用が急増し、河野家や服部家、川越家、伊東家の4家の部分林権集積が明治32年(1899)から急速に進んだ。これらの主立った大規模山林所有者が堀川運河の上流に土場と呼ばれる大規模な貯木場兼製材所を設けたため、油津の堀川運河周辺は飫肥杉弁甲の一大集散市場となった。大正4年(1915)から昭和18年(1943)にかけては、上記4家など、主立った大規模山林所有者が相次いで堀川運河護岸の石積み工事と物揚場(斜路)新設を行っている。とりわけ大正4年(1915)に河野宗四郎が新築した護岸石積み

は116間（約210m）で、延べ12間の物揚場を設けている。さらに、大正2年（1913）に開通した飫肥油津軽便鉄道は、昭和初期には油津停車場から堀川運河まで引き込み線を2股に延長して、物資輸送の改良を行っている。

飫肥杉需用の増大に伴い、製材所の開設も相次ぎ、明治42年（1909）、飫肥の小玉孝輔外数名が、資本金5,000円で蒸気機関の製材所を瀬戸口で開業したのを皮切りに、大正12年（1923）までに飫肥地方に18の製材所が開業した。

こうした飫肥林業の発展により、大正13年（1924）の山林伐採所得者数は、50,000円以上1人、10,000～50,000円9人、5,000～10,000円11人、2,000～5,000円40人、2,000円以下499人の計560人であった。（当時の油津町助役の月給70円）

大正10年（1921）の弁甲移出先は、中国・四国地方が75%、京阪地方20%、大島・沖縄地方5%であったが、昭和16年（1941）は、中国・四国地方63%、朝鮮・満州20%、台湾・沖縄7%、近畿8%であった。

大正11年（1922）の主要林業家は、油津の河野宗四郎が1,300町、製材所2箇所、帆船5艘、続いて飫肥の川添勇太郎と川越亀一郎がそれぞれ750町と続く。販売高でみれば、飫肥の服部新兵衛9,857肩（11肩＝1トン）、川越亀一郎9,475肩、油津の服部右平次8,000肩で、河野宗四郎は2,045肩であった。

このようなマグロや飫肥杉景気は、「マグロ音頭」で「港油津マグロの山に千両万両の花が咲く」と唄われた。油津には、仕事を求めて多くの人が集まり、大正9年（1920）から昭和15年（1940）にかけて人口が約2倍に膨れ上がり、当時としては、宮崎県内で人口密度が最も高く、都市機能が集積した都市になった。漁業も、マグロ漁は遠洋漁業となって、油津や外浦漁港に以前のようにマグロが大量に揚がることはなくなったが、現在は、カツオの一本釣り漁獲高が日本一となっている。

第2次世界大戦を経て、昭和25年（1950）に飫肥町、油津町、吾田町、東郷村の4町村合併による市制施行で日南市が発足した。市役所は吾田に置かれ、県の総合庁舎も飫肥から吾田に移っていった。つづいて、昭和30年（1955）には鶴戸村、細田町、昭和31年（1956）には酒谷村、榎原村の一部を編入した。この時、榎原村の橋ノ口及び大窪の一部は、昭和15年（1940）に町制施行した南郷町に編入した。また、北郷では昭和34年（1959）に町制施行した。平成21年（2009）には、日南市、北郷町、南郷町の1市2町が合併して新「日南市」となった。



油津港まつり（昭和25年）

7. 民 俗

南九州の東岸に位置する日南市は、地理的に日本列島弧と琉球弧の分節点となっている。そのために、民俗的にも、畿内からの文化と、南西諸島からの文化が重なる場所でもある。また、南九州は、律令期に隼人の地でありながら、『古事記』や『日本書紀』におけるニギノミコトの降臨から神武東征までの4代が、日向を舞台としており、天皇家の本貫地となっている。なかでも海幸山幸の物語では、隼人の起源が説かれており、南西諸島との交流のあった隼人と律令国家成立が深く関わっていると推察される。

したがって、本市の民俗芸能にも、海幸山幸神話を表現した神楽（魚釣り舞）や十五夜綱引き、さらに、ヤマト政権による隼人征服に関わる弥五郎人形行事など、日向神話や隼人に関わるものが見られる。とりわけ、宮崎県南部を中心に分布する神楽や獅子舞は春期の昼間に催されることから、県北部の高千穂神楽に代表される冬の夜神楽と対照的である。

本市を代表する民俗芸能である泰平踊は、江戸時代はじめからの盆踊りで、武士も町民と一緒に踊っていたと伝えられている。

なお、年中行事等の本格的な調査は実施していないため、次頁以下に示した昭和50年代の調査が唯一のデータであり、現在は行われていない行事も多い。

（1）伝統行事

神楽	潮嶽神社神楽、(潮嶽神社) 御神子舞（市指定文化財）、伊比井神社神楽、宮浦神社神楽、風田神社神楽、駒宮神社神楽、益安神社神楽、大宮神社神楽、田ノ上八幡神社神楽、霧島神社神楽、山宮神社神楽、酒谷神社神楽、岩崎稲荷神社神楽、吾田神社神楽、曹子神社神楽、平野神社神楽、隈谷神社神楽、吾平津神社神楽、大窪神社神楽、塚田神社神楽、萩之嶺神社神楽、毛吉田神社神楽、上方神社神楽、九社神社神楽、三島神社神楽、秋葉神社神楽、潟上神社神楽、榎原神社神楽、谷之口神社神楽、贅波神社神楽
獅子舞	(潮嶽神社) 獅子舞（市指定文化財）、山宮神社獅子舞、田ノ上八幡神社獅子舞、大宮神社獅子舞、酒谷神社獅子舞、岩崎稲荷神社獅子舞、吾田神社獅子舞、曹子神社獅子舞、平野神社獅子舞、吾平津神社獅子舞、隈谷神社獅子舞、大窪神社獅子舞、塚田神社獅子舞、毛吉田神社獅子舞、萩之嶺神社獅子舞、三島神社獅子舞、秋葉神社獅子舞、愛宕神社獅子舞、鶴戸の獅子舞、潟上神社獅子舞、谷之口神社獅子舞、榎原神社獅子舞、日御碕神社獅子舞、中村神社獅子舞、霧島神社獅子舞、桜木神社獅子舞、脇本神社獅子舞
踊り	棒踊り（宿野）（市指定文化財）、寺村剣棒踊り、女相撲踊り、臼太鼓踊り、榎原よいやな、潟上棒踊り、谷之口太平踊り
盆踊り	泰平踊（県指定文化財）、風田の盆踊り、宮浦盆踊り、益安盆踊り、乙東盆踊り

牛まつり	萩之嶺神社牛祭り、上方神社牛祭り、大窪神社牛祭り、脇本神社牛祭り
綱引き	榎原十五夜綱引き
人形行事	田ノ上八幡神社の弥五郎人形行事（県指定文化財）
う た	さとねりうた、酒谷田の草取りうた、目井津子守舟歌、地しめ唄、ぜふり、 風田盆踊り歌、榎原まいり、北郷木挽歌



伊比井神社神楽



大窪神社獅子舞



風田の盆踊り



榎原 十五夜綱引きの綱



泰平踊（古写真）



棒踊り（宿野）

(2) 年中行事

年中行事は、県史編さん室の調査で図師幸憲氏他2名により作成された旧日南市、北郷町、南郷町の調査票によった。地区ごとに取りまとめた一覧は巻末資料に掲載した。

1月の正月行事、3月から4月にかけて行われる神楽、11月の神社例大祭などに年中行事が集中する。開催日が旧暦から新暦に代わるものが増えているほか、近年では生活様式の変化に対応して神社の大祭を日曜に変更するところも増えてきている。

※「宮崎県年中行事調査票」

月	日	新	旧	
1	1	○		床飾り、歳徳神供え
		○		潮嶽神社歳旦祭
		○		家庭の正月
		○		家庭の正月
	2	○		鐘鬼大臣、大黒さん
		○		仕事始め・初荷
		○		船祝
	7	○		初詣り
		○		七草雑炊、餅割り
	10	○		七日正月
		○		十日祭
		○		エビス講
		○		恵比寿講
		○		牛祭り
	11	○		漁神楽
	11	○		鉢入れ(立木)
	12	○		こんじゃれ
	13	○		十五日正月
	14	○		山神祭
		○		祝ってたもれ、いをたもれ
		○		門松倒し、粥の飯
		○		かせだ打ち、なり切り
	16	○		藪入り
	17	○		山の神祭り
	20	○		骨正月
	23	○		二十三夜さん
	24	○		火祈念
	25	○		船祝(1月中)
	27	○		お諏訪さま
		○		ブリ祈念(1月上旬)
		○		むくろ打ちとくもめ上げ
		○		もぐら打ち
		○		成り木打ち
2	1	○		かんぐりかき
		○		鐘緒織り
		○		朔日・十五日参り
		○		鵜戸神宮例祭
	2	○		節分
	3	○		節分
	8	○		針供養
	8	○		針供養神楽
	11	○		潮嶽神社春大祭
	15	○		時ぼんさん
		○		朔日・十五日参り
		○		初うま(2月最初の午の日)
		○		柳の日(初の卯の日)
		○		初丑(最初の丑の日)
		○		野焼き(ほさき)
		○		作神楽

月	日	新	旧	
3	3	○		上巳の節句(雛祭)(桃の節句)
	15	○		榎原神社春祭
		○		鵜戸さん、榎原さん参り
	16	○		榎原神社御縁日
		○		霧島祭
	17	○		大師講
	20			春まつり
	21			弘法大師縁日接待
				浦祭り
	25			作神楽
	26	○		火祈念
	27			竹香園桜まつり
		○		四半的
		○		団体的
		○		作神楽
		○		縁日祭
		○		彼岸
		○		さのぼり
		○		目白取
		○		かねおり(16日前後の日曜日)
		○		卒業式
		○		山の神まつり
4	1	○		更衣
	3	○		慰霊祭
	5	○		慰霊祭
	7	○		霧島神社例祭
	8			灌仏会
	15	○		時ぼんさん
	31	○		招魂際
		○		入学式
		○		慰霊祭(上旬)
		○		虫キネン(サノボリ)(下旬日曜)
		○		作神楽
		○		団体的
		○		漁神楽
5		○		豊漁祈願祭
		○		郷之原神楽
	2	○		八十八夜
	5	○		端午の節句
		○		馬術競技
	10	○		別当・宮司・先賢慰霊祭
		○		エビス講
				こんじゃれ
	16	○	○	山師祭り
	23	○		二十三夜まつり
	24	○		虫祈念
		○		火祈念
				六地藏参り
				成子舞

月	日	新	旧	
6	1		○	万石舞
	9		○	水神様祭り
	12		○	虚空蔵祭(ひるの祭)
	14	○		祇園さん祭り
	15	○		祇園会
			○	祇園様の祭
	16		○	かんのん様祭
			○	日之御崎神社祭
	21			鐘の緒あげ
	23	○		愛宕神社夏祭
	26	○		稲荷神社夏祭
	29	○		ヤンバレ(大祓)
	30	○		潮嶽神社大祓
			○	早稲植えまつり
			○	のろおとし、さのぼり
			○	虫まつり
				虫まつり(サフェ追い)
			○	火の6月
7	7	○		七夕
	13		○	孟蘭盆 精霊送迎
	14		○	盆踊
	15		○	
	16		○	もろこ漁
			○	贈答
	25			五百禊神社例祭 (ごしんでん)
				水島祈願
				油津港まつり
				川下し
8	1		○	八朔の節句
	2	○		七夕まつり
	3	○		赤面法印灯ろう流し
		○		お墓の掃除
	7	○		墓(盆)道作り
		○		墓こしらえ
		○		迎え火
	13	○		精霊迎火
		○		寿太郎まつり
		○		盆踊り大会(～14日)
	14	○		お盆(～15日)
		○		お供え(～15日)
		○		盆踊
9	15		○	十五夜、十五夜行事
			○	十五夜綱引き
	16	○		送り火
	17	○		竹道切
	9		○	菊の節句
			○	9月9日
			○	エビス講
			○	こんじゃれ
	10		○	行藤神社秋祭
	15	○		敬老の日
	16	○	○	山の神祭り
	23		○	二十三夜待ち
			○	二十三夜さん
			○	秋分の日
				虫祈念(夏・秋)
				火祈念

月	日	新	旧	
10	10	○		体育の日
	23	○		豊年祭
	24		○	秋葉講
				亥の日(10月初亥の日)
				亥の子突き(10月初亥の日)
				飢肥城下まつり(10月末土日)
11				いのご祭(10月第3亥の日)
	3		○	文化の日
				上中村神社秋祭
	5	○		潟上神社例祭
	9	○		榎原神社秋祭
	10	○		松尾神社例祭
		○		霧島神社例祭
	11	○		大宮神社例祭
		○		潮嶽神社秋大祭
	13	○		平佐神社祭
	14	○		吾平津神社大祭
		○		山貊祭(～16日)
	15	○		吾田神社大祭
		○		郷之原神社大祭
	16	○		上郷神社祭
		○		河原谷神社祭
		○		駒宮神社例祭
	17	○		大藤神社祭
		○		谷合神社祭
	18	○		田代神社祭
	19	○		お日待ち
		○		桜木神社例祭
		○		黒山神社祭
	20	○		脇本神社例祭
		○		火祈念
	22	○		八幡神社例祭(～23日)
		○		坂元神社祭
		○		愛宕神社例祭(～24日)
	23	○		日の御崎神社例祭
		○		伍社神社例祭
	24	○		稲荷神社例祭(～25日)
	25	○		ごくあげ
		○		贅波神社例祭
	28	○		広河原神社祭
12			○	小鳥神社祭(初辰の日)
			○	黒荷田神社祭(初午の日)
				カメゾコ飲み(例大祭の日)
	1	○		書野神社祭
	3	○		曾和田神社祭
	5	○		板谷神社祭
	23	○		餅つき(23日頃の吉日)
	25			クリスマス
	26			正月準備
		○		床飾り
	31	○		年の夜
		○		潮嶽神社大祓
		○		節木切り
		○		門松たて
		○		忘年会